令和３年度山口県教育会　現職研修助成事業研修概要

周南市立櫛浜小学校

１　研究主題

自ら学び続ける児童の育成
～「深い学び」を実感できる学習過程の工夫を通して～

２　研究仮説

〈全体仮説〉

学習過程（課題提示の仕方や対話的活動の設定、振り返りの書かせ方）を工夫することで、子どもたち一人ひとりが「深い学び」を実感することができ、自ら学び続けるのではないだろうか。

〈低学年研究仮説〉

一人ひとりが「ためす・くらべ合う」活動の場を設定することにより、子どもは「体験する楽しさ」を実感し、「発見する喜び」を感得しながら、自ら「新たな活動」に取り組んでいくのではないだろうか。

〈中学年研究仮説〉

必要感のある課題を提示し、他者との考え方を比べ合う対話活動を設定することで、子どもたちは、自分の考えをより確かなものにしたり、新たな見方・考え方に気付いたりすることができ、自ら学び「深い学び」を実感できるのではないだろうか。

〈高学年研究仮説〉

一人ひとりが活動への目的意識をもち、思考ツールを用いた対話活動を行うことによって、新たな見方・考え方を獲得したり、自らの考えを多様な面から捉えて深められたりするのではないだろうか。

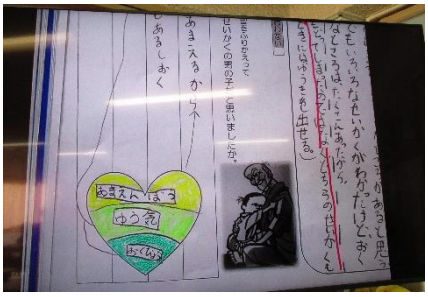
３　研究の主なあゆみ

日　程	内　容	備考
4 月 28 日	ICT 活用研修【担当：高見教諭】 「ミライシードでできること」	講師：周南市教育委員会教育研究センター ICT 教育推進室 ICT 教育アドバイザー　秋山　久夫　様
5 月 12 日	校内研修 ・本年度の校内研修の方向付け ・研修主題、副主題の決定	
5 月 19 日	校内研修【担当：高見教諭】 ・櫛浜小の「深い学び」イメージ像をつくろう	

7 月 8 日	第１回研究授業　５校時（　５学年　） 授業者：高見　直弘	指導者：山口県教育庁義務教育課 指導主事　齋藤　尚子　様 指導者：周南市教育委員会学校教育課 指導主事　近森　利栄　様
7 月 26 日	特別支援研修【担当：丸山教諭】 「発達障害の理解とユニバーサルデザインの授業づくりについて」	講師：山口県立徳山総合支援学校小学部 地域コーディネーター　永島　美保　様
7 月 27 日	綱紀保持研修【担当：井上教頭】 「ハラスメントについて」	講師：市教委人権教育課 指導主事　藤本　哲雄　様
7 月 28 日	ICT 活用研修【担当：高見教諭】 人権教育セミナー【担当：神代教諭】 〈サテライト研修活用〉	講師:周南市教育委員会教育研究センター ICT 教育推進室 ICT 教育アドバイザー　秋山　久夫　様 講師：教育調整官　田中　康夫　様
10 月 28 日	第２回研究授業　５校時（１学年） 授業者：福寿　香織	指導者:山口大学教育学部附属光小学校教諭　兼安　陽一朗　様
11 月 17 日	第３回研究授業　５校時（４学年） 授業者：村田　宏仁	指導者：周南市立高水小学校 教頭　真山　義憲　様

４　研究の実際

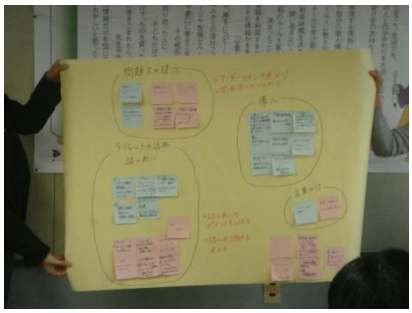
校内研修
「深い学び」について教員が話し合っている様子



第３学年　国語科
ハートメーターを用いて登場人物像を可視化する工夫

第５学年　国語科
新聞のより良い見出しについて話し合う様子

第１学年　国語科
自分の考えをペアに伝えている様子



校内研修
研究授業後の検討会で話し合った内容をまとめたところ

第４学年　算数科
タブレットを用いて、考え方を友達に説明している様子

5　主な研究の成果と今後の課題

〈成果について〉

低　学習内容に繋がるゲームやストーリー性のある課題提示をすることにより、子どもたちは、体験する楽しさやストーリーの登場人物と同化する感覚を味わうことができた。この過程で、子どもたちは、本時の課題を自分ごととして捉え、「やってみたい」という意欲を喚起することができた。【課題提示】

低　ICT の活用・説明の仕方のパターン化などにより、自分自身の「ためす」活動を確認し、他と比べ合う際の手がかりとした。操作活動の学びの足跡を残し、見直し（軌道修正）や振り返り、他との比較をする際には、ICT 機器の活用は大変有効であった。【比較する活動、学習評価】

中　身近な生活に関わるものを想起し、具体物を提示したり、実際に操作をしたりすることで関心を高めることができ、見通しをもたせやすくなった。さらに、これにより、児童が「話し合いたい」「解決してみたい」という意識が芽生え、対話活動へとスムーズにつながったと考える。【課題提示、対話活動】

中　思考を可視化するツールとして、ICT 機器（タブレット端末）の活用は大変有効であった。ICT 機器等を活用することで、自分の考えを図や言葉で表現しやすくなり、一度にさまざまな意見と比べることができた【比較する活動、対話活動】

中　振り返りの視点を以下のように絞って掲示し、「か、わ、い、く」を合言葉としてきた。

「か」…かわったこと、「わ」…わかったこと、「い」…生かしたいこと、「く」…くらべたこと

これにより、子どもたち自身が自らの学習を振り返って言葉に表出し、学びを意味づけたり価値づけたりして「深い学び」を実感できる一助となったのではないかと考える。また、評価の際に変容が視覚的にとらえやすかった。【学習評価】

高　同じパターンで課題を解けるように課題の提示の仕方を工夫したり、活用できる既習事項を掲示したりすることで、児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。【課題提示】

高　ICT 機器を活用（ムーブノート）することで、言葉を発しなくても相手の意見を知ることができた。また、手を挙げて発表することに抵抗がある児童でも、タブレットを活用することで、自分の考えを書く活動に取り組みやすくなったように感じる。【対話活動】

〈課題について〉

低　ペアやグループで紹介し合う場を設定したが、教え合ったり、伝え合ったりする活動にとどまった。「くらべ合う」ポイントを明確にし、「新たな気付き」が何を意味しているのかについて教師が見通しをもって提示できれば、子どもたちの思考に深まりが出てくるのではないだろうか。【比較する活動、対話活動】

中　「話し合いタイム」では、伝え合う、比べ合う段階まではできたが、確かめ合う段階に引き上げることに課題が残った。「確かめ合う話し合い」を実現させるためには、何らかの手立てが必要と考える。【対話活動】

中　「深い学び」へとつなげる振り返りの視点を再構築していく必要があると感じた。【学習評価】

高　「深い学び」に迫るためには対話活動が有効と考えるが、自分の考えを書いたり、話したりすることに消極的な様子が見られ、対話活動がうまくいかないこともあった。タブレットに自分の意見を書かせ、それを共有することで学習意欲の高まりが感じられた。【対話活動】

〈研究の総括と来年度に向けて〉

○研究の総括

上記の各ブロックの振り返りを総括すると、全体の成果として、授業の導入における学習課題の提示については大きな成果を上げている。課題の提示にストーリーをもたせたり、いろいろな解き方・考え方ができる課題を用意したりすることで、子どもたちの学習意欲を喚起することができた。また、授業の導入では子どもたちに見通しをもたせることも重要であり、発達段階や学習内容によって見通しのもたせ方を工夫することもできたと言える。

副主題に掲げる「深い学び」に繋げるためには、次の２点について様々な取り組みがなされた。１点目は、対話活動の充実である。どのブロックの授業でも友達と話し合う活動が設定されていて、対話活動が「深い学び」に繋がる重要な要素と捉えていることがわかる。２点目は、学習評価についてである。副主題に掲げる「深い学びを実感する」とは児童が深い学びを実感することである。そのためには児童自身が学習を振り返ることが不可欠であり、そのための実践が様々な方法でされてきた。この２点については各ブロックで方法を模索したり、検討会で話題にあげたりしてきたことで、一定の成果もあったが課題も残されている。

また、今年度本格的に導入された ICT 機器の活用については、校内研修の場だけではなく、普段の授業から積極的な活用が進んでいる。操作の仕方や効果的な活用について教職員が互いに教え合う様子が見られ、教職員・児童ともにスキルが上がっていると感じる。

○来年度に向けての課題

来年度にむけて、次の３点を課題としてあげたい。

１点目は、**対話活動の充実**である。様々な実践により一定の成果はあったが、どのブロックでも深い学びを実現するまでには至っていないと感じている。対話活動を充実させるためには、学習経験を積むこと、対話のパターンや話型を学ぶこと、自分の考えをもたせること、何について話すか焦点化することなど様々な面から反省があがっている。中でも、「比較する」という言葉が多く見られ、対話活動を充実させるための重要なキーワードになると思われる。

２点目は、**効果的な学習の振り返り**についてである。自らが「何をどのように学んだか」「何ができる、分かるようになったのか」を自覚することが深い学びの実現につながる。そのためには学習の振り返りが重要になるが、そこにいくつか課題があがっている。例えば、発達段階や学習内容に応じて振り返りの方法を工夫すること（顔マークの活用、キーワードの提示、振り返りの視点を決める、自由記述など）、振り返りの時間の確保が難しいこと、振り返りの次の学習への生かし方などである。ICT 機器の活用によって、振り返りの時間を短くしたり、データ化して管理しやすくしたりする方法を考えてみてもよいだろう。

３点目は、**ICT 機器の効果的な活用**である。この一年間で教職員も児童も様々な ICT スキルを身につけることができた。今後はそのスキルを生かして、より効果的な学習を創造していくことが求められるだろう。また、使用頻度が上がり、スキルがあるからこそのトラブルもあると思われる。そうしたトラブルに対してどのように対応していくかも今後の課題としたい。